

齋藤武生教授のご退任にあたり

長谷川信子

本学は今年度開学20周年を迎えた「若い」大学である。そして、本学大学院は、1990～1997年に学長でいらした井上和子先生の構想の下、開学5年目の1992年に言語科学研究科修士課程（英語学専攻・日本語学専攻）が、その2年後の1994年に博士課程（言語科学専攻）が設置された。当時の文部省（現文部科学省）に大学院の数を増やす構想があったとはいえ、開学7年目にして博士後期課程の設置が実現したのは異例の早さであったろう。そして、その直後の1996年からの5年間、大学院では、文部省肝煎りの大型研究プロジェクト（COE）をスタートさせることができた。本大学院のような規模も小さく歴史も浅い大学院がCOEの助成を受けるというのも、また異例のことであった。そして、齋藤先生が本学に着任されたのは、まさに、その真っ只中の1999年であり、今日に至るまでの9年間を研究科長として大学院を導いて下さった。

齋藤先生はその間、COE研究の恙ない遂行の環境を整え、COEを母体にした「言語科学研究センター（CLS）」の大学院への附置にご尽力下さった。大学院の研究環境は格段に整備されたのである。また、教育面では、2002年に本大学院から課程博士第1号が輩出されたのだが、大学専任教員への道が狭まりつつある現況で、今年度までの博士号取得者の全員が大学専任教員として職を得るといふ道を開いて下さった。そして、この時期は、井上和子先生はじめ、大学院の設置と関わった先生方のご退任、それに伴う新任教員の着任が重なり、大学院の研究・教育体制の再確立が迫られた時期でもあった。上述したように、大学院は設置からの数年間「異例づくめ」だったのだが、同時に体制上に多少の「拙速」や「軋み」を看過せざるを得ない面もあった。そして、そうしたことが解消され、現在の大学院運営体制や教育・研究体制の充実を得ることができたのは、一重に、齋藤先生が筑波大学や大学基準協会で培われた豊富なご経験を駆使してご尽力下さったお陰である。2007年度には、論文博士制度も発足し、齋藤先生のリーダーシップの下、設置から15年を経て、本大学院は名実共に「1人前の大学院」と自負できる研究・教育機関へと成長することができ

言語科学研究第14号（2008年）

たのである。

本学大学院の名称は「言語科学研究科」であり、博士課程は「言語科学専攻」であるが、今でこそ「言語科学」という名称は、他大学でもコースや専攻、研究所名に採用されたりし、違和感もなく受け入れられてきているが、大学院設置当時は、まだ馴染みの薄いものであった。日本においては、人文学の代表格としての「言語」と理工系領域とされる「科学」とは、容易には相容れないと認識されていたと思われる。しかし、生成文法に代表される理論言語学の「言語はヒトの生物学的特性」との考え方を受け、また、21世紀は「脳」の時代とも言われるが、脳の高次機能と最も端的に関わるのが言語であることが認識され、言語に科学的にアプローチすることが当然になりつつある。しかし、同時に、言語には「生物としてのヒトが持つ能力」だけでは説明のつかない文化と関わる側面があることも事実である。

斎藤先生のご研究は、巻末のご業績一覧からも明らかのように、理論言語学から英語語法研究、さらに、英語教育文法研究と多岐にわたるが、「言語文化学」に関するものが一番のご専門と思われる。しかし、管見では「言語文化学」というのは未だ確立した学問分野とは言い難い。むしろ、斎藤先生のご研究によってその確立もその守備範囲とする領域も明らかにされつつあり、それは、言語の文化的側面を単純にその言語を共有する国や文化の反映として観察・記述するのではなく、言語表現に潜む文化的特質・表れ方に注目し、それを言語運用システムも含めたヒトの言語能力の観点から科学的に明らかにしようとする学問なのである。そこには、当然、言語の構造体系の解明を目指す理論言語学の知見も生かされなくてはならないし、語や表現が示す比喻や語法、諺などに見られる規則性や考え方を注意深く考察しなくてはならない。そして、言語間の相違には統語・文法的な側面とは別に言語運用や表現の仕方に関わるものも含まれているわけで、それらを体系的に明らかにすることが目指されているのである。

言語文化学の知見は、必然的に言語学（英語学・日本語学）と関わり、その観点からの対照研究は、言語に表れる物の見方、考え方を明らかにすることから、言語教育や翻訳といった実践的な分野への応用が期待でき、先生がご担当になった「言語文化研究」は、専攻を問わず、常に人気の高い授業であった。

本大学院のように英語学と日本語学、および英語教育学と日本語教育学、コミュニケーション学が、言語間の垣根を越えて、言語、言語教育、コミュニケーションの観点からお互いに知見を高め合うことを目指す研究科においては、斎藤先生の「言語文化研究」は、その象徴的な授業であった。英語におけるコミュニケーションが重視される最近の英語教育の状況下においても、また、そういう状況下だからこそ、学生諸君には、表面的な意志の疎通と理解にとどまるのではなく、言語表現の裏に隠された語法、意味、文化を読み解く面白さ、大切さを理解してもらいたい。斎藤先生の講義はまさに、それを、先生の見識の深さとお人柄とも相まって、学生達が肌で感じることでできるものであった。この授業の大切さを思うと、先生のご退任後も、先生の著作に触れながらも、継続が望まれるのだが、先生のご講義ほどには造詣の深いものとはなり得ないと思われ何とも残念である。

先生はご退任後も、言語文化学の研究を、今度は大学・大学院の雑事に追われることなく思う存分追求されると確信している。本大学院の冠名称の「言語科学」は学問分野として確立してきている。「言語文化」も学問領域として、先生のご研究によって広く認知されるに違いない。

斎藤先生は、ご着任下さった1999年の時点では、筑波大学での学群長や付属図書館長といった激務を伴うご要職の後であったことを考えると、おそらく、本学ではご研究に集中できることを期待なさっていたと思われます。それにもかかわらず、上記のような状況から、研究科長として大学院の研究・教育の充実に多大なエネルギーと時間を注いで下さったこと、大学院専任教員の一人として誠に有り難く思う次第です。また、先生の懐の深い暖かいお人柄に包まれ、教育や研究は言うに及ばず様々な雑務にも常に真摯・誠実に対処して下さるお姿に触れ、私共教員も大学院生も含め大学院全体は、常に非常に「上質な場・空間」を享受させていただきました。本当に有り難うございました。先生のご退任にあたり、先生のご尽力、ご指導に深く感謝申し上げますと共に、先生のますますのご健勝を祈念いたします。